

# 教 仏 名 聞

第17号  
(発行日)

2012年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 肉体からの解放

私たち現代人は一般的に何を一番求めているのであろうか。それは長寿(健康)とお金ではなからうか。それを本にして、さまざまな娯楽や道楽や享楽(きょうらく)を楽しもうとしているのである。

執着である。私と身体を同一化している、そういう見方が身見である。人は老化現象や病気や死そのものに悩むというよりは、老いゆき・病いとなり・死ぬ身体である(私)に悩んでいるのではなからうか。

妨げるものとは、老化であり、病気であり、死であり、そして貧乏である。「私も歳をとった、さみしいなあ」とか「何でこんな病気になったのか」とか「そろそろ死ぬのが近づいた。いややなあ」とかいつて悩んだり(わすら)煩ったり不安に思ったりするのである。

それは自然のすがたである。しかるに自然にそうなる肉体を(私)とし、そういう「身体である我」に非常に執着しているから、その執着する心が悩みの本になる。身体に執着することによって逆に身体に束縛されてしまうのである。

しかし、こうした苦しみや不安が起る原因は何かといえ、それは仏教という(身見)であろう。見というのは見方、考え方、見解という意味であり、身見とは「身体が私である」という思いであり、考えであり、思い込みであり、

そこで仏教とは(肉体への束縛から解放する教である)と、このようにもいえることができる。仏教の教えはいろいろな方面からいえることができ、また表現することがで

### 《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日(日) 午後二時始

講師 藤谷知道師(大分県宇佐市)

### 《 春季彼岸会法要 》

三月二十二日(水) 午後二時始

(おかみそりを希望される方は申し込んで下さい)  
彼岸法要の後で執行いたします)

きょうが、一番現代人に分かりやすく、端的にいうとすれば「仏教とは身体から解放される道である」といえよう。

のではなく、老いにくも病になることもなく死ぬこともない無量のいのちである阿弥陀仏に依りかかるのである。

ではどうすれば、肉体から解放されるのであろうか。

それは浄土の仏教である真宗から言えば南無阿弥陀仏に

であうことによつてである。

私たちは知らず知らず私の人(主軸)を置いている。そんな私たちが南無阿弥陀仏に

あつて、肉体から南無阿弥陀仏に軸足(主軸)を置き変えることによつてである。とい

うことは、肉体に依りかかる

阿弥陀仏はすでに南無阿弥陀仏となつて私に「我に依りかれ、我をたのめ」と喚びかけられている。無限なる阿弥陀仏に依りかかると、束縛されるどころか本當の自由が与えられる。この世の物から解放されて自由になつていく。

さて、南無阿弥陀仏に依りかかるのは、南無阿弥陀仏を称えることから始まる。称え

# 正信偈に学ぶ問答

## (三十八)

本師曇鸞梁天子

常向鸞処菩薩礼

三藏流支授淨教

焚燒仙經歸樂邦

鸞——曇鸞。

三藏——仏教の経・律・論に精髓し、それを漢訳できる人の尊称。

淨教——淨土の教え。ここでは『觀無量壽經』あるいは『淨土論』。

仙經——道教の書籍で、ここでは不老長寿を説いた陶弘景の『衆醮儀』。

樂邦——極樂淨土。

\*

D 「曇鸞大師は北京の西方、中国第一の仏教聖地である五台山の近くで生まれました。

十五才で出家し、最初は龍樹菩薩の『空』の教説を学んで四論宗の学者になりました。

そして大部な『大集經』の註釈を志しました。しかし、自分の体が弱いので長生きが望めず、これではとても註釈は完成できないと思い、先ずは不老長寿が先決であると思

ました。それでその道の大家である道教の隠者だった陶弘景を江南に訪ね、彼から不老長寿の道を書いた『衆醮儀』

十卷を得て、それを持って洛陽の都に來ました。そこでインドから來て經典の翻譯を行っていた菩提流支三藏に会いました。曇鸞は流支に『佛法の中に、この衆醮儀よりも勝れた不老長寿を説くものがあるか』と問いました。そうすると流支は地に唾を吐いて、『何を云うか。佛法に比べられるような法がどこにあるか。この中国のどこに眞の長生の法があるか。もしあったとしてもそれは少しばかりのちを長らえるだけであり、ついには迷いの世界を流転してしまふのである』と曇鸞を叱ったといわれていま

す。そして流支は曇鸞に『觀無量壽經』または『淨土論』を授けて、さらに告げて、『これによって修行すればまさに生死を解脱するであろう』と。この厳しい菩提流支のお諭しによって、曇鸞は愕然として自らの誤りをさととり、大事に持っていた衆醮儀十卷をその場で焼き捨てた、と言われて

います。この曇鸞の回心はすこぶる劇的だったのです。それを聖人はここで述べられたのです」

A 「大変印象的な話ですね」

D 「聖人は、曇鸞大師が『仙

ず南無阿彌陀仏をただ考えているだけなら、南無阿彌陀仏は現実化してこない。それはまだ自分の思い中のものではない。しかし一度、南無阿彌陀仏を称えようと南無阿彌陀仏が現実化して現れたことになるのである。称えることによつて南無阿彌陀仏がすでに現実化している。

ただ、称え現れて下さつて南無阿彌陀仏であるけれども、それが私の人生の主軸であるとはなかなかこちらが気がつかないのである。すぐには気がつかないのである。

南無阿彌陀仏を称えるのは、老いを悲しみ、病いを嫌い、死ぬことをおそれる、あるいはさまざま人間関係などというわずらい悩みを縁として、お念仏を申すことが始まり、また続いていくのである。

こうして、お念仏を申すことはとりもなおさずお念仏を聞いていくことになるのである。煩い悩みを縁としてお念仏を称え、お念仏を聞かされるのである。

こうしてお念仏を聞きつつお念仏の思し召しを聴聞していくと、『南無阿彌陀仏ナム

アミダブツ』と耳に聞こえる

お念仏の声は「汝を引受け、汝を淨土に連れていく」という我ならざる大悲の声、すなわち阿彌陀仏の親心であることが知れる。私を助け、引き受けたもう私の主が南無阿彌陀仏と名のつてくださったことに気がつくのである。

それがとりもなおさず、人生の軸足が肉体から南無阿彌陀仏に移行したことに自然になつていくのである。それがいわゆる『助かる』ということである。

そうすると南無阿彌陀仏の方が私の主であり、実在であり、眞実なるものであることがほのかながら実感的に知れる。ほのかであるが、確實であつて一度と消えはしない。少しでも知れたら、肉体的な束縛から開放される道がついたのである。

こうして肉体に同一化していた『私』が南無阿彌陀仏の眞実そのものに、やがて全く同一化される時がくる。それを仏に成るといふのである。それはこの世を終えて淨土に生まれる時に成就するとお聞かせいただいている。(了)

本師——本宗の祖師。

曇鸞——七高僧の第三祖。中国・魏の人(西暦四七六〜五四二)。大同府の雁門に生まれる。十五才で出家し、『空』の教説を学んだが淨土教に帰し、玄中寺さらに平遙の山寺に住む。六十七才寂。

梁の天子——中国南北朝時代の南朝・蕭王(武帝)。

十卷を得て、それを持って洛陽の都に來ました。そこでインドから來て經典の翻譯を行っていた菩提流支三藏に会いました。曇鸞は流支に『佛法の中に、この衆醮儀よりも勝れた不老長寿を説くものがあるか』と問いました。そうすると流支は地に唾を吐いて、『何を云うか。佛法に比べられるような法がどこにあるか。この中国のどこに眞の長生の法があるか。もしあったとしてもそれは少しばかりのちを長らえるだけであり、ついには迷いの世界を流転してしまふのである』と曇鸞を叱ったといわれていま

す。そして流支は曇鸞に『觀無量壽經』または『淨土論』を授けて、さらに告げて、『これによって修行すればまさに生死を解脱するであろう』と。この厳しい菩提流支のお諭しによって、曇鸞は愕然として自らの誤りをさととり、大事に持っていた衆醮儀十卷をその場で焼き捨てた、と言われて

います。この曇鸞の回心はすこぶる劇的だったのです。それを聖人はここで述べられたのです」

A 「大変印象的な話ですね」

D 「聖人は、曇鸞大師が『仙

経を焼き捨てて浄土の教えに  
帰された。ことに大事な意義  
をみておられると思います」

A「どういう点で」

D「曇鸞様は不老長寿の道を  
きっぱり離れて、不生不死の  
道を説く仏法にひとえに帰依  
されたということです。これ  
は現代でも大事なことだと思  
います」

A「現代人は何を求めている  
かと言えば不老長寿ですね」

D「ええそうです。長寿健康  
を結局求めている。これが偽  
りのない現代人の本音です  
ね」

A「しかしたとえ不老長寿を  
求め、それによって命が延び  
たとしても少しばかりながら  
えるだけで、結局死はまぬが  
れないですね」

D「ええそうです。それで曇  
鸞様は、仏法は生死を解脱す  
る道すなわち生まれることも  
死ぬこともない真実のいのち  
を得る道、いわば死なない道  
なのだという流支の厳しいお  
諭しで目が覚めたのですね」

A「長寿を求めると、生死を  
超える道を求めるかが問われ  
たのですね」

D「ええそうです。これは現  
代でもちっとも変わりません  
ね。今日、不老長寿を可能に

するのは、経済と科学技術（  
医学など）ですね。それでも  
まだ不安だから、神仏に祈願  
したり現世利益の宗教（病氣  
治しや貧乏からの脱却）に走  
ったりしてます。それらは皆、  
不老長寿を求めている姿で  
す。しかし、たとえいのちが  
少し延びても死んでます。必  
ず死はやってきます」

A「現代人が不老長寿を経済  
と科学技術（医学など）ばか  
りに求めたり、神仏への祈願  
などに走るの、それしか知  
らないためでもあると思いま  
す。仏法というものが何を説  
いている教えなのかを知らな  
いから、そこばかりを求める  
ともいえますね」

D「そうなんです。真実の  
宗教にたいする無知がひどす  
ぎます。日本の多くの知識人  
も宗教の本質に無理解です」

A「仏教は長生きではなくて  
死なない道を説くのですね」

D「ええそうです。ここで死  
なないというの、生まれも  
しないし死にもしないのち  
（真実在）そのものことで、  
それはいつでも今ここに來て  
いる働きでもあります。そこ  
で聖人は『教行証文類』の信  
巻の最初のところに端的に

大信心はすなわちこれ、長  
生不死の神方

と仰せになっていきます。お念  
仏の信心は不死の神方である  
と、すなわち死なないのち  
をいただく素晴らしい方法な  
のだと仰せられています」

A「結局は死んで滅んでしま  
う人生としてしかみないか、  
それとも死なない道に出るか  
が求められ、曇鸞様は死なな  
い道を説く仏法にきっぱりと  
帰せられた。そういう曇鸞様  
を聖人は讃えておられるので  
すね。そうしますとこれは私  
たちにとっても大きな課題で  
すね」

D「その通りですね。勿論、  
身体を大事にし、医学技術の  
恩恵に浴することを否定する  
のではありません。この世に  
生かれるご縁があれば、与え  
られた肉体を大事にして生き  
きり、ますます仏法の真実を  
深くいただいくことは望  
ましいことです。ただ、人生  
の根本的な軸足をどこに置く  
てこの世を日々生きていく  
か、何を私の真の依りどころ  
にするかという点での選びが  
極めて大事なのです」

A「ところで曇鸞大師は仏法  
の中で（楽邦）に帰されたと

言われますが、楽邦とは浄土  
ということですから、楽邦に  
帰すとは（浄土に往生する教  
え）に帰依されたということ  
ですね。仏教の中での（空の  
教学）である三論宗の学者に  
までなっておられた大師がな  
ぜ浄土の教えに帰依されたの  
でしょうか」

D「聖人が、仙経を焼き払っ  
て（仏教）に帰したともいわ  
れず（浄邦）の教えに帰され  
たということは、これも大事  
な意味があると思います」

A「どういふことですか」

D「それは、仙経に惑ってし  
まった自分は、今まで長く学  
んできた三論宗の（空の教え）  
がちつとも身に付いていなか  
ったことを、流支の厳しいお  
諭しによって身に浸みて感じ  
られたのではないでしょう  
か。どれほど仏教の深い空の  
真理を学んでも、自分はそれ  
をちつとも身につけることが  
できなかった、なんと愚かな  
曇鸞であるかと、ご自分の愚  
かさに目覚められたのではな  
いでしょうか。そして、自力  
の仏法に見切りをつけて、愚  
かな凡夫が助かる仏法である  
往生浄土の教え、いわゆる本  
願他力に救われて浄土に生ま  
れさせていただく浄土の仏法

にきっぱりと帰依されたので  
はないでしょうか。そういう  
意味も（梵焼して楽邦に帰す）  
という言葉の中に込められて  
いると思います」

A「私たちは生死の問題に対  
してまだまだ自分の力でなん  
とかなると思いい、自分の知性  
で解決できるのではないかと  
思い、なかなか自分の力を見  
限って阿弥陀仏に帰さないで  
すね。自分の知性や能力を頼  
みにする心がある意味では  
（焼き捨てて）阿弥陀仏のお  
助けに思い切つて帰順するこ  
とが、このお話で求められて  
いると思うのですが」

D「そうもいえるでしょう」  
（了）

### 《住職雑感》

一月十八日に名古屋市内の坪井さん宅  
で法話・座談会が開かれ寄せていただ  
いた。初めてお会いする方も数人おら  
れた。熱心な方が多く、また座談会も  
有意義であった。やはり座談会をして自  
分の受けとったところを話してみない  
と教えはなかなかその人に徹底しない  
のではなからうか。知らず知らず聞き  
間違いや聞きそこない、あるいは聞き  
足りない点があり、しかも本人にはそ  
れに気づいていないことが多いからで  
ある。

# 信心夜話

『一蓮院談合録より』(13)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カ  
ッコ内は私の所感)

師ある時、香樹院師の前に出て申さるるよう。信には疑いはなければ、も、それでも心持ちの悪い時があり、ますが、こういう時はどう心得てよろしうござるか、と。

香樹院師の仰せに、そんなことを、それほどまでに云わずと、念仏していらしゃえのう。

(私はこの世が終わったら本当に浄土に至るのであるうか。地獄や畜生などの暗くて苦しい境界にいくのではなからうか。こういう問いを現代の私たちはほとんど問題にしていけない。しかし、まもなくこの世は終わる、さあこの世から出かけるとなると、その先は一体どうなるのだ。一蓮院師はこういう問題を、ないがしろにすることのできない一大問題として感じておられるのである。それは師が愚かだからではない。あるいは考えすぎだからではない。心配性だからではない。実際真剣に、へまもなく自分の人生は終わる、さあ俺はいつたいどうなるのか)と問うてみる。こういう問題に対して知識人はよく(そんな分からぬ先のことを問題にするよりは今を大事にせよ)とい

つてかわすけれども、もし私が死にかけているとすると、もはやかわしようになくなる。私はまだまだ自分は死なないと思っているから、こういう問いを軽んじるのである。

こういう問いを前提にして、この一蓮院師の(心持ちの悪い時がある)という意味を考えれば、ここで何を云おうとされているか分かるのではなからうか。次の師の言葉に(出かけると思えば、何やら案じられて)というのがそれである。さて、いよいよこの世を出て行かねばならないとなると、本当に浄土に参れるのであろうか。参れそうなものは私には一つもなく、我が心は煩惱ばかりあり、信心を得たような色は一つもない。はたしてこれで大丈夫かというように案じる心がふつと起きる。それがここでいう(心持ちの悪い)という実感ではなからうか。これは信心をいただいた後でも、死を思い、死後を思い、それに対する自分の心や姿を見たときに、(これでよいのかしら)という思いが湧くことは十分あり得るのである。そういう案じる思いが湧くにつけて、一蓮院師は次のように述べているのである)

いつも我が身を見れば信得たやうなところもなければ、出かけると思えば、何やら案じられて、首尾よく行けば善いと云うような心中だて、そこに微塵も案じげのない、如来様のお助け。助ける人が助けてやろう

と仰せらるる仰せをきけば、まことに胸に徹倒して、困るに困らさぬ。氣遣うものに氣遣はせぬ、不確かなものに確かな、こうも根氣に相応した如来の御助け。名号の謂れをうけたまわれれば、思わず歡喜(よろこば)にやおられない。念仏を称えにやおられない。

(助かるような色もしるしも我が心には何一つない。ところがそこに如来様の(助ける)の仰せ。この仰せが(胸に徹倒して)如来様の仰せはまことである、確かである)と感じられる。それが信心の不思議というものである。我が行き先は不透明、真つ暗にもかかわらず、(そんなお前をこそ、助ける、引き受ける)との大悲の仰せ。阿弥陀仏の誓いも不思議であるが、この誓いを(確かなお助け)と受け入れているのも不思議。実に単純な(助ける)(引き受ける)(浄土に連れていく)との言葉(勅命)がとても有難く、いつも初事のように感じられる。これが信心であるが、信心は無疑心である。本願に疑いのないのが不思議である。信心のことを金剛心といって、もはや二度と壊れず、どんな違った考えや思想を聴かされても退転しない。聖人は我が身にいただいた信心に対して(ただこの信を崇めよ)と自らに起こった信を崇めると、仰せられている。実際、それが自然である。自分の上に起こった信心であるが、とても私の心が起こした信心ではない。私の心はふらふらしらずであり、空っぽであり、煩惱ばかり。そんな私の心に発起した信心は(無根の信)といわれるように、起こるはずのない本願への無

疑の心が発起したのである。与えられたのである。弥陀の誓願も不思議であるが、その誓願を(ああ有難い)(確か)と受け入れている信心も不思議である。極めて有り難い信(極難信)である。

自分の心の中を見たら、浄土に生まれるとか仏になるとか、そんなことがとてもあり得るはずがない。まったく煙のような、大風に灰をまいたような心である。だから自分の心をのぞくと(これでいいのか)というような(氣持ちの悪さ)(案じ氣)が起こるのは無理もない。しかるにこんな私の心はもうすでに計算済みで建てて下さった本願であり、こんな私だからこそ(助けずにはおかない)(助けさせてくれよ)とまで仰せ下さる南無阿弥陀仏様である。私の心を見れば地獄行きだが、南無阿弥陀仏を仰げば、助かるほかはない。聖人は

『往生は、なにごとにもなにごとにも、凡夫のはからいならず、如来の御ちかいに、まかせまいらせたればこそ、他力にてはそうらえ』(ご消息)と仰せられている。(凡夫の側に助かるものがちりほどもあるのじゃあないよ。汝が助かるのはまったく如来様の不可思議なお誓いばかりによるのだよ。どうかこの不思議なお誓いに阿呆になつてまかせてくれよ)と聖人はお勧め下さっている。

そうなるにあとは、香樹院様が(念仏していらしゃえのう)仰せられるま、言うこと尽きてただ(念仏を称えにやおられない)のである。